



## 「限界」について思うこと

石原秀志

「わたしは、これをくぎつて境を定め、  
かんぬきと戸を設けて、

言った。「ことまでは来てもよい。

しかし、これ以上はいけない。

あなたの高ぶる波はここでとどまれ」と。

(ヨブ記三八・10―11)

ヨブ記のなかでも比較的よく知られた、この三八章には

「あなたはおぼる座の鎖りを

結びつけることができるか

オリオン座の綱を解くことができるか。」

(同じく31節)

をはじめとして、全能者の前に、すべてのつくられたものの与えられた限界をよみとることができることばが、あらしの中から答えられる主のみことばとしてしるされている。

私にとって、この一九七五年の年頭の聖句は、詩二四・一の「地とそれに満つるもの、世界とその中に住むものとは、みな主のものなり」であったが、このことを、「漢詩」とは言えないしろもの乍ら次の四行に意識してみた。

地興充滿其中者  
全是屬天地之主  
今人不悟此真理  
天興地將無明夜

というのが、私自身の心境でもある。

最初の「ここまでは来るべし、これを越えるべからず」ということの中に、単なる自然現象をこえて、人間もまた創造者によつて定められた限界を無視することはできないのではないかというヨブ記作者の倫理観を汲みとることができるし、その限りにおいて、詩二四編のはじめにある句も、被造物である人間の、彼をとりまく自然に対する倫理的責任を問うコトバとして受けとめることができる。

これらのことを考えながら、この春卒業した学生たちの小さな文集に、「限界ということ」と題して小文を寄せた。それを多少取り上げさせていただきたい。

・・・標題に即して考えるとき、我々は、さまざまな意味で〈限界〉をもっていること、あるいは限界状況によつて囲まれているということに、特別な関心をもたされる時代を迎えたのではないか。

政治も、経済も、社会も、科学と技術も、思想と教育と生活も、たしかに人類の歴史と共に偉大な進歩をしてきたし、今後その歩みは、依然として続くに違いない。国連加盟の一四〇に達する大小の国々も、それぞれのおかれた状況の中で発展のための努力をしてきた。・・・(中略)。一億の人口が、三八万km<sup>2</sup>の国土に溢れている日本も、第二次大戦後から三十年間はひたすら「発展」をめざして走り続けて来た結果、先進国の中でも極めて高い成長率を達成しうるに至った。しかし、ここ一年間、考えても見なかつたゼロ成長を経験したのみでなく、恐らく今後は、かなりの減速を余儀なくされることは確かであろう。

最近、次の三冊の「限界論」を読む機会があつた。「成長の限界」(メドウスら)、「生存の限界」(高橋浩一郎)及び「人間の限界」(霜山徳爾)。

これらは計測経済学者、気象学者、臨床心理学者として、それぞれ自己の専門を中心に、世界経済の成長力の減退乃至低下、人類生活環境の悪化に伴うさまざまな好ましくない状況の出現、そして社会や人間関係の複雑化に伴つて個々の人開の生き方についての、未来のような影響が現われつつあるかというような問題について、未来を展望しながら論じているが、共通しているのは、このままの状況が進行することによつて起るであろう事態に対するおそれと警告・・・我々の直面しつつある事態の中に、人間の諸活動につ

いての限界性を認めてできるだけ賢明な対応をすることが求められているということであろう。

人類は、地球上の動物の一員でありながら、特異な能力の獲得によつて、他の生物と比較を絶する種族として自然界に君臨し、独自の文化を作り上げてきたと言えるが、そのことは、人間が常にあらゆる限界に挑戦し、それをのり越えてきた存在であつたことを意味する。「記録は破られるためにある」というが、このことはスポーツの世界のことだけではなく、学問や技術の世界にも妥当する。原子力の開発や宇宙技術の進歩、あらゆる微視的世界の探求などもその結果であるし、今後もそのための努力は続けられるに違いない。

若い世代の特権の一つに、正しくあらゆる過去の記録に挑戦することであり、その限り時代の進歩は新しい世代の双肩にかかつており、「教育」もまた、過去の文化遺産の伝達のみ止まることなく、新しい人間能力の開発への努力であることは明らかである。

それにもかかわらず、人間能力の上昇にもある限りのあることを忘れ、無視するとき、あのギリシャ神話のイカロスの愚かさを繰り返すことになりかねないのみならず、人類全体の危機を招来するおそれすらあることをきびしく問われつつある時代に、今我々は生きている。

「汝自身を知れ」という古くして新しい格言は、正しくこの人間のもつ限界性への警告であつた。数年前まで夢をふくらませてくれたあのバラ色の未来論が急に凋落して、今はその反動ともいふべき極端な終来論の装いをした悲観論が抬頭しているが、学問的裏付を欠いた感情論だけでは、やがてまた色あせる時がくるであらう。

二十世紀の最後の四半世紀の門口に立つ今、我々にとって必要なことは、我々の置かれている座標を確認しつつ、可能な限りで「限界への挑戦」という文化の原動力への努力を進めながら、我々を取巻く諸状況の中で、何がより価値のある我々の接近目標であるかを明らかにしていくことではないか。

国連人間環境会議（一九七二年六月）の宣言の冒頭にある「人間は環境によつて創造されたものであるが、同時に、環境を創造しうる存在である」というコトバを、今一度しっかりとかみしめたい。……

凡そ以上のようなことを書いたのであるが、もつと明確に言えば、文化とその形成者としての人間のもつおごり（「ヒューブリス」）にこそ現代の危機を見出すべきだということであり、このおごりをすてて創造者の前に謙ることなしには、正しく人類の未来には無明の夜しかないであらう。

ヴェトナムやカンボジアで今進行しつつある極限に近い悲惨さも、中近東における無気味な対立と抗争も、そしてその他の多くの地域での差別や憎しみや殺し合い（その中には日本の「過激派」グループの陰惨なテロも含まれる）も、結局は自己とそのグループの「義」を主張し、優位を確保しようとする人間や民族のおごりの故であり、「己が腹を神とする」とパウロが指摘した人類の罪の結果に外ならない。

今から四五年前、藤井武が「旧約と新約」の最終号（一二一号）に書き残した詩「亡びよ」に比えて言えば、

世界は興りつつあるのか、それとも滅びつつあるのか

我が愛する世界は祝福の中にあるのか、それとも呪詛の中に

か。……

というべき状況を思わざるを得ない。しかし、亡びよ！という藤井武の祖国に向けられたはげしことばを、そのまま世界に向けることができるだろうか。私にはわからない。

ただ、最後に、「神はすべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順のうちに閉じ込められた」（ロマ一章）というパウロのことばはまた私にとつてもはげましと希望にみちたものであることを付記しておこう。（一九五四、四、一六）

（後記）

最近行われた「国際遺伝子工学会議」の結論をめぐって「生命科学の倫理」という問題がテレビ番組で四月一九日取上げられたが、その中で湯川博士の、人間の知識は無限に追求されてよいかどうか反省すべきではないかという発言は印象に残った。シュバイツアーの「生命への畏敬」はいろいろの見方があるとしても、生命科学の分野に限って言えば、やはりそのような高い倫理性の裏付のない知能探究は、「学間の自由」の名のもとに無限定に進められてよいとはいえない。

### エレミヤ書ノート(二)

野 本 和 幸

#### 三、エレミヤの第一期預言活動(その一)

(一) 今回は六二七年二十三才頃召命をうけて、ヨシヤ王による宗教改革(六二一年)まで数年間の、エレミヤの預言活動について、主にエレミヤ書第二章から六章までの記事により、学びたいと思う。

エレミヤの幼少年時代は、アッシリヤの最盛期にあたり、ヨシヤ王(在位六四〇―六〇九年)に先立つ、マナセ王(六八七―六四二)、アモン王(六四二―六四〇)にとつては、アッシリヤの

属臣以外の選択は全くありえなかった。その結果、異教は以前にまさつてヤハウエ宗教に重大な影響を与えた。

マナセ王は「高き所を建て直し、バールのために祭壇を築き、アシラ像を造り、かつ天の万象を拜んで、これに仕え」(列王紀下二十一・3)エルサレムの神殿にも、こうした異教の祭壇や偶像を造らせた(同上、517)のである。アモン王にしても同様であり、後にヨシヤ王が六二一年の宗教改革において、破壊にこれ努めねばならなかった偶像や異教的祭儀として、例えば、バールの祭壇、高き所、アシラ像、アシタロテ礼拝、天の万象、太陽・月・星宿の礼拝、モロク崇拜、神殿男娼等々(列王紀下、二十三・4―25参照)が列挙されている。これをみれば、エレミヤの若き日、異教が驚くべく殷盛を極め、微菌のごとく国中に蔓延(はびこ)つていた様は、目に余るものがあつた。

このような恐るべき祖国の状態を眼のあたりにして、エレミヤは戦慄を覚えざるを得なかつた。

「さあ、キツテムの島々に渡れ、使いをケダル(1)に遣わし、尋ねみよ。かつてあつたか、このようなことが。神を神でないものに変えた国があるとは。わたしの民はその栄光を無益なものに変えたのだ。天よ、このことを驚け、ふるえ、おののけ」(二、10

13)

(1)「キツテム」はキプロス島の町キテイオン、しかしむしろギリシヤ、ローマを含む西方世界全体を意味し、「ケダル」は、シリ

ヤ・アラビアの沙漠の一遊牧民を指すが、東方世界全体を意味し、併せて当時の全世界を指す（関根正雄「エレミヤ書」）

かくてこの時期におけるエレミヤの預言は、荒野におけるイスラエルの純粋な信仰が、カナンの沃地文化、アッシリヤの異教に影響されて、宗教的道徳的に墜落していく、そのことに対する斗いに集中される。つまりこの時期のエレミヤは、エリヤ・ホセアの預言活動を真直に継承しているのである。ホセアの預言の中心問題も、カナン宗教化した当時の北王国の信仰の浄化、純化にあった。しかも彼は外から冷たい批判を下したのではなく、彼自らの悲劇的な家庭生活の経験を通し、問題の内側から涙ににじむ愛の労苦を重ねたのであった。（関根正雄「十二小預言書」（上）解説参照）エレミヤまた然りである。

（二）エレミヤは先ず、沙漠時代の神とイスラエルの関係を想起し、それを新婚の蜜月時代にたとえる。

「わたしは君の若き日の真実、新嫁の時の愛を思いおこす。その時君は、荒野なる種播かぬ地でわたしのあとに従った。イスラエルはヤハウエの聖きもの、その収穫の初ものであった。（二・213）

ヤハウエとイスラエルの関係は、神が夫として妻たるイスラエルを選んだ「契約」の関係である。そしてこの選びの関係を常に支え、生命あらしめているものが愛であり、真実（純情）に他な

らぬ。この場合の「愛」は人間自然の愛で、何か為にする所あつての愛ではなく「無条件的な愛」といわれる。神は民を無条件的に愛し、民もそれに対して無条件的に答える。「純情（真実）」とはそれに対し、契約の枠の中にある、各々の責任の立場において愛する愛、その意味で「条件的な愛」である。（浅野順一「真実」二十一〜二頁参照）イスラエルは「種播かぬ」即ちこの世の文化の入りこまぬ荒野において、そのような真実と愛をもつて神のあとに従ったというのであるにもかかわらず、「君達の先祖は、わたし（ヤハウエ）に、どんな悪いところを見つけて、わたしから離れたのか。彼らは空しいものあとを追ひ、空しいものになった」（二・5）のは何故か。それは、イスラエルが神の愛と真実を裏切ったからである。「罪とは、はじめの愛から転落し、逸脱すること」（浅野、同、二十五頁）である。「空しいもの」とは偶像のことであり、人が真に頼りにすべくもないのに頼りとするものである。頼みにならぬものを頼ることによって人は自ら空しくならざるを得ない。ソクラテスの斗った「無知」も、たゞ何も知らないということではなく、頼りにならぬものを頼りとする事、どうでもよいものを何かひどく大切な貴重なものとして固執することであった。が、（田中美知太郎「ソクラテス」岩波新書）、偶像崇拜の本質もそれと同じである。ソクラテスの「無知」は 従つて、このように自他のうちに根を張っている、頼りにならぬものを頼りとする「無知」との斗いの末に、辛

くも到達されるものであったが、偶像とはしたたかに頑強なるものであつて、それとの斗いは容易ではない。偶像は、それ故にも手で造つた金の像ばかりではなく、富も権力も名誉も学問も芸術も、恋愛もマイ・ホームも、階級も党派も、企業も国家も、これすべて偶像になりうるわけである。

さて、エレミヤはイスラエルが荒野から沃地に入ったこと自体を墜落とみなしたのでないことに注意しなければならぬ。「エレミヤ書」第三十五章において、閉鎖的セクトと化したレカブ人の信仰をエレミヤがそれ自体として積極的に推奨していかないことから、このことは明らかである。エレミヤの信仰は決して反文化的ではない。問題は、沃地文化の中に入って、しかも沙漠時代の純な神との関係を貫きとおすことであり、イスラエルはこの測り知れぬ困難な課題を正しく負い通すことを求められたのである。「カナンにあつてイスラエルはカナン人の如くならず、なおイスラエル人でなければならぬ。そしてそれはなかなか容易なことではない。しかしこの容易でないことを『はじめの愛』は彼らに求めている」（浅野、同上、二十七頁）のである。しかし、イスラエルはそれを負うことが出来なかつた。神は怒りと嘆きをもつて言わざるを得ない、

「わたしは実り豊かな土地に君達を導き、その実と良きものを食わせたが、君達はわが地に入って、それを汚し、わが所有地をいとうべきものにした。」（二・七）

信仰と文化の問題は、現在の私達にとつても、本当に切実な問題である。私達に求められているのは、レカブ人のような反文化主義でもなく、また沃地文化に信仰の根元まで腐敗させられて、空しいものに頼つて空しいものになってしまうことでもない。文化の底にまで入つて、しかも純な信仰によつて文化を真に支えること、これ以外ではあり得ない。信仰と文化、それは、アウグスチヌスをはじめとして、中世以来今日に至るまでの全ヨーロッパ思想史を貫く根本問題であり、私達にとつてもそれは無限に痛切な課題である。私達はどの課題をどのような根本的姿勢で負うべきか。「イスラエルは沙漠においてヤーウエを呼び求めたように、カナンにおいても同じ神の名を呼び求めねばならない。……日本の基督者は、今日なお異教の世界に取り囲まれている。……その時、我々の問うべき問いは、キリストはどこに在すかということである。場所が違つても、時代が變つてもこの問いを根気よく問い続けることによつて、はじめの愛から転落し、逸脱することを免れることができるのであると思う。……信仰生活とは、どのような場所、どのような時代においても、同じ問いを一生涯問い、同じ答を答え続けることに他ならない。」（浅野、同上、二十七―八頁）

（三）さて、エレミヤの時代も先に触れたように、農業地カナンにあつて、とりわけ地方の聖所では、農作物や家畜の多産の神々

「パール」（これは山の主ぬし）、池の主などといった「主」にあたり、男神と女神にわかれ、その性的な交わりにつてすべての産物が生まれるとされた。）の礼拝が行われ、当然のことながら、結婚ならざる姦淫が、祭りとして公然と行われ、様々の淫行（例えば、処女たちは聖所において祭司と交わり、胎をひらかれる儀式など）と結びついていた。のみならずヤハウエ宗教自身も、パール化してこのような儀式と混合し一体と化していた。この様を、エレミヤは、直截かつ赤裸々に表現して憚らない。彼の慣りは、御上品ぶつて、事態を暖味にすることを許さない。

「君は今総ての高い丘、緑の木の下で、遊女のように脚を拡げる。」(二・20)

「君は叛逆のイスラエルのしたことを見たか。彼女は総ての高い山の上と、総ての緑の木の下に赴いて、そこで姦淫を行った。・・・しかも、不実なる姉妹ユダは少しも恐れず彼女も又いつて姦淫を行った。」(三・6・8)

第二に、日本でよく見られるように物を礼拝する宗教があった。

「彼らは、木に向つて『あなたはわたしの父』と言ひ、石に向つては『あなたはわたしを生んだ』という。」(二・27)

それはいわゆる物神礼拝であり呪物礼拝に他ならない。

また第三に、モロク崇拜というフェニキアに由来する残虐な宗教があった。「モロク(モレク)」とは「王」の意味であるが、ヤハウエ宗教はこのモロク崇拜とも結びついたのである。

「君はどうして言えようか、パールの後を追つて身を汚したことはない。谷の中の君の所業を見、君が何をしたかを知れ。」(二・23)、彼らは谷で何をしたか。

「ベンヒンノムの谷にあるトペテの高き所を築いて、おのが息子、息女を火に焼いた。・・・それゆえ見よ、もはやトペテはベンヒンノムの谷と呼ばれないで、殺戮の谷と呼ばれる日が来るであろう。」(七・31・32)

更に、第四に、アツシリヤの宗教がマナセ王により導入され、ユダ国内に殷盛を極めた。その主なるものは、天后礼拝である。

「天后」とは、アシタルテ(ないしイシタル)と呼ばれる神で金星である。この天后は、学問芸術の神として、婦人たちがとりわけ熱心に崇拜した。また太陽・月・星宿の礼拝が行われたことは先述のとおりである。

「君は見ないのか、彼らがユダの町々で、エルサレムの通りで何をしているかを。子供達はたきぎを集め、父親達が火を起し、女達は天后に供せられる菓子を作る為にパン紛をこねている。」(七・17・18)

このような惨担たる有様が全租国を覆っているのを前にし、エレミヤは深い畏怖を感じざるを得なかった。



彼は叫ぶ。

「目をあけて多くの禿山を見よ、君が淫行に耽らなかつた所はどこにあるう」(三・二)

「まことにユダよ、君の神々の数は、君の町々の数に等しい。」(二・28)

こうしたバール化したヤハウエ宗教に従っているのは、一部の無知な民衆のみならず、むしろヤハウエの宗教的指導者階級がこうした異教的祭儀の推進者なのである。まさに恐るべき事態と言わねばならない。

「祭司らは言わない『ヤハウエは何処(いずこ)』と。律法を扱う者はわたしを知らず、牧者はわたしに背き、預言者はバールによつて預言し、無益なものあとを追う。」(二・8)

このような宗教的・道徳的墮落は、直ちに社会的不正と直結してゆき、富者、権力者の横暴を生み出した。

「わが民の中に悪しき者あり、網をはり、鳥取りのようにわなを設け、人を捕える。籠に鳥の満つる如く、偽りはその家に満ち、それによつて栄え、かつ富める者となる。彼らは肥えふとつて悪事を重ね、正しき裁判を行わず、孤児の訴えを退け、貧しい者の為に裁かない。わたしは赦せるか、この人々をとヤハウエは言われる――報いをせぬにおこうか、こんな民に。」(五・26―28)

また頼るべからざるものに頼るとき、外交政策も動揺常なき無定見に陥るのも当然である。

「君はまあなんと易々とその道を変えることよ。君はアッシリヤから恥を蒙つたように、エジプトからも恥を受ける。」(二・36)

政治批判においても、エレミヤは、ホセアの直系である。

かくてエレミヤは絶叫せざるを得ない、「驚くべきこと、恐るべきことがこの国に横行している。預言者は偽りの神によつて預言し、祭司はおのが権威(ちから)によつて教え、わたしの民はそれを喜ぶ。しかし。終りの日がくるとき、君達はなす術を知らないであろう。」(五・30―31)

エレミヤはこのような民の惨状が、要するにユダの二つの罪に究極するという。

「まことに、わたしの民は、ふたつの悪事を行った。彼らはわたしを捨てた。自から水ためを掘るために生ける水の源を。その水ためはこわれた水ため、水を保つことはできない」(二・13)

自然に湧き出る水の乏しいパレスチナでは、雨水をためる水溜めが多用された。「それは一時のかわきをいやすためには役に立つ。」

しかしそれは急場をしのぐだけである。やがて地割れがして、その中の水は地中に吸収されてしまう。しかるに、生ける水の源は、小さい泉かもしれない。けれどもその水は尽きることがなく、あとからあとから新鮮な水がふき上ってくる。ヤハウエはこの生ける水の源。「(浅野、同上、三十二頁)ユダの二つ悪事は表裏一体であり、真の神を捨てるということは、即それに代る

自分で造った神を選ぶこと、己が腹を神とすることに他ならない。このエレミヤの美しい話は、新鮮で清冽な生命の真清水を捨てるとき、私達は各々勝手に空しき水溜めを掘り、溜り水を飲んで滅びの途を死に急いでいるのではないかと問いかける、深い比喩である。

これは、「わたしが与えられる水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水がわきあがるであろう」(ヨハネ伝四・14)というイエスの美しい譬えを私達に想起させる。エレミヤは、民の惨状とその由つて来たる罪を前にして、「我々が生きる苦しみに直面する時、我々はどこに生命のよりどころを求めたらよいのであろうか。エレミヤは、この永遠に古く、又永遠に新しい問いを、直接にはイスラエルに対し、間接には現代の我々に対して問うている」(浅野、同上、三十五頁)のである。

(四) このようなユダの民の背きの姿を前にして、エレミヤは民がかつて実際に経験したエジプトによる脅威、アッシリヤによる北イスラエル王国の滅亡(七二二年)を民に想起させ、

「君がその神ヤハウエを捨てたのでこの結果を招いたのではないか。君の悪が君を責め、背きが君を罰する。君がその神ヤハウエを捨て、わたしを畏れる心がないのは、悪しきこと、苦きことなるをよく知らねばならぬ。」(二・17・19)

と警告を発する。しかも、ヤハウエの眼からみれば、ユダの罪はぬぐいようもなく明々白々であった。

「わたしは君を良い葡萄、みな良い種として植えたのに、どうして悪い野葡萄に変わったのか。たとえソーダをもつて身を洗い、多くの灰汁(あく)を加えても、君の罪はわたしの前に汚れのままで。(二・21-22)

このような民に審判の降ることをエレミヤは予測せざるを得なかった。

民はしかし聞きいれるどころではない。バール宗教の性的狂操に狂い、ついには文化の世界からさえ逸脱し、荒野に出奔する。

民はむき出しの欲情に駆り立てられて一切をかなぐり棄てる。このすさまじいエロースの姿を、エレミヤは「交尾期の駱駝」によつて比喩なき迫真性をもつて表現する。

「君は恰もさすらいの牝の駱駝、とつぜん曠野へと走り出す。欲情に駆られて、いきをせき、その欲を鎮め得るものはない」

(二・24)

この一節も、詩人としてのエレミヤの圧倒的な表現力を示している。いかなる忠告も無駄である。

「なんとおっしゃつても無駄ですよ、わたしは外国(よそ)の男達が好きなのです。彼らのあとを追いかけるばかりです」(二・25)

ここに生命の泉であるイスラエルの神ヤハウエと、カナン神バール、またヤハウエに従う人間と、バールにつく人間と、二つ

の途がはつきり対置されている。エレミヤは、宗教を簡単に人間の解放とはみなされぬ。むしろそれは、「軛」「繩目」(二・20)であるという。

バール宗教は自然のまゝの人間性の解放に誘うが、ヤハウエ信仰は、生のまゝの人間性の制御をたてまえとするといわれる(浅野、同上、四二頁)。バールに誘われてユダの人々は「われわれは自由だ、もはやあなたのところへは行かない」(二・31)という。けれどもこの「自由」は、「罪への自由」であつて、そのためイスラエルは罪の奴隷となつたのである。この「自由」はむしろ「さ迷い歩き」(関根訳)と訳す方が適切であろう。

いまやイスラエルは、奴隷、しかも解放されることのない「家に生まれた奴隷」(二・14)となり果てたのである。ヤハウエかバールかという問題は、先に述べたように信仰と文化の問題であり、私達の生の根柢をヤハウエにおくか、己が腹におくかという選択である。

(五)のみならず、「真実」をなによりも重んずるエレミヤに、より深い幻滅を与えたのは、民の二心であつた。

「いつもは顔をそむけて頂(うなじ)をわたしに向けているのに、困つたときには『立つてわれらを救い給え』という彼ら。君の作つた神々はどこにいる。困つたときには彼らが立つて君を救えばよい。」(二・27・28)

「マナセ王の時代以来国民は盛に種々の偶像を祭つたが、一方ではエホバ礼拝を全然棄てたのでもない。同時に両者を礼拝して、その間に何らの矛盾撞著を感じなかつたのである。・・・エレミヤに取りて最も堪え難きは、正にかゝる二心であつた。エホバに対する信仰は、エホバを唯一の神として事へる貞操である。従つて神々と名のつくものならば、どんな神々を拜んでも同じだとか・・・エホバの神と他の神々を併せ礼拝するとか、凡そそのような言い逃れはエホバに対する信仰には適(そぐ)はない。二心を交えた信仰は信仰ではない。それは虚偽であり、姦淫である。エホバに対する貞潔觀念の喪失は、単なる偶像崇拜よりも尚ほ憎むべきである。之は神の名称の問題ではない。信仰の根本問題である。」(矢内原忠雄、「青年のエレミヤ」嘉信第三号、一二七―一二八頁)

民はかゝる二心をもち、不真実でありながら、しかも自らに罪なしという。ヤハウエは、エレミヤは、断然争わざるをえない。

「なぜ君達はわたしと争うのか、君達はみなわたしに背いた」(二・29)「どうして君は言える、『わたしには罪がない、彼の怒りはわたしから離れた』と。『罪なし』と君は言うから、見よ、わたしが君を審くのだ。」(二・35)

## 愛の便り

土浦市 H 姉

過日内村先生記念講演会の折には、久々にお目にかかせていただきほんとうに懐しゅうございました。

諸先生の力に満ちた霊の糧をいただき、心の洗われる思いでございました。特に石原先生の若々しいお声をうかがい喜びで一杯でした。偉大な内村先生の創設なさった無教会信仰、思想、真理は、次代へとうけつがれて、多くの人々の魂の救いとなって生きつづけていらつしやる。真の神を知り、キリストの十字架を生きる信仰の意義、大切さを改めて深く深く感じました。

「ふたり又は三人、わが名によつて集まる所には、私もその中にいる。」(マタイ18・20)

無教会は有教会であるとの石原先生のお言葉が、今も心の奥に残つて思い出されます。ほんとうに恵みの一日でした。あれから大分日もたつてしまいました。お礼をと思いながら実は主人が突然足の痛みを起こし、激痛の時は歩行も出来ない有様、医師に注射をして頂いて痛みを止め、四、五日安静して痛みがとれますと働きに出て、又痛み出すという症状に二月から苦しめられておりました。傍で見ております私は、心配の余り眠れない夜もありました。こんな時は悪いことばかり考えてしまつて、歩行困難になつたらどうしようなどと思ひますと、じつとしていられませんでした。そんな時講演会が開かれたのでございました。御講演をうかがつたあとよく考えました、罪のないイエス様が、十字架の死をとげ、復活なさつたことなど……

私はただ癒されたいと一心に祈りました。それから主人の罪による苦しみならば、どうか私に背負わせて赦して下さい。

もし神のみ心ならば、み心に従つて素直にお受けして、耐えることが必要なのだと考えが變つてきました。自分を反省しながらひたすらに祈りました。主人も治療をつづけておかげ様で、この頃は痛みもとれ、もうすこしで治りそうだと明るい気持ちになりました。

私は病弱者ですから、依頼心が強く、そのため相手を思いやるいたわりの心がたりないのです。神さまを信じると言葉では申しても、苦しみに会いますと、思い患うばかりのほんとうに弱い私は、神さまにおすがりして生きる以外にないのでございます。苦しみと共に大きな恵みを知りました。(後畧)

### 後記

○謹んで第七十六号をお届けします

○矢内原忠雄全集(初版)全二十九巻希望者は、御連絡下さい。ある方よりお預りしています。

○夏期特別聖書集会は、八月二十三日午後より、二十四日午前笠間市吾国山頂、県立洗心館にてイエスの受難研究、希望者は申込んで下さい。一泊三食千円位、水戸線笠間駅よりバス、山頂までは乗用者又は徒歩、眺望は絶佳、利用者は狭き門より入ることになつていきます。祈御平安

(半田)

水戸無教会 第七十六号

昭和五十年五月 発行

水戸市緑町三一九二六

水戸幼稚園内

発行人

編集人

松本文助

半田梅雄

(実費七十円 二十円)